

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995
10

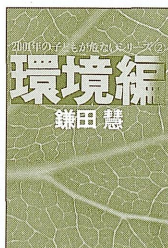


第94巻 第10号 日本幼稚園協会

2001年の子どもが危ないシリーズ

子どもたちを取り巻く様々な社会現象や問題点を各分野の第一人者が分析・追究、近未来の子どもの姿を予測した。子どもの心身の健康のために、さらに個性の伸長のために、環境を考え、我々大人がぜひ今すべきことの全てを提案します。

②環境編

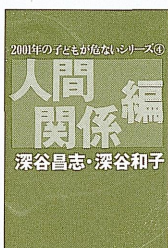


四六判 230頁 定価1,200円(本体1,165円)

第一線のルポライターの著者が子どもを取り巻く様々な環境を精力的に取材。21世紀の子どもの近未来を予測。

鎌田 慧
(さとし) 著

④人間関係編

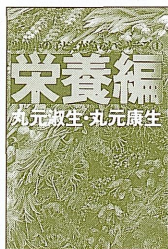


四六判 232頁 定価1,200円(本体1,165円)

「子どもが見えない」現代、21世紀に向けて家庭、学校、社会各々の環境下で大人と子どもとの人間関係を模索。

深谷昌志・
深谷和子 著

①栄養編

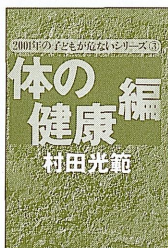


四六判 252頁 定価1,200円(本体1,165円)

飽食の時代の今日、豊かさのもたらした危険な食生活の問題点を分析・追究。未来に向けての食環境の知識を満載。

丸元淑生・
丸元康生 著

③体の健康編

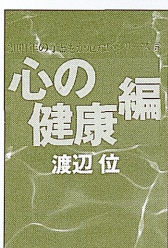


四六判 240頁 定価1,200円(本体1,165円)

高血圧、糖尿病、胃潰瘍、心身症…、成人病の影が子どもに忍び寄る。親子で真の健康教育を学ぶ究極の一冊。

村田光範 著

⑤心の健康編



四六判 230頁 定価1,200円(本体1,165円)

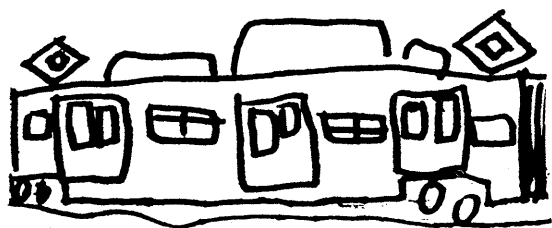
現代社会の激流の中で苦悩する子どもたちの心と長年付き合いしてきた著者が原点に戻ることと知り得た心理とは!?

渡辺 位
(たかし) 著

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第94巻 第10号



幼児の教育 目次

— 第九十四巻 第十号 —

© 1995
日本幼稚園協会

〈巻頭言〉「教育」過剰の教育不在……………小川 博久…(4)

忙中の読書

「ソーシャルロールバリゼーション入門」を読む……………津守 真…(6)

保育学文献賞を受賞して

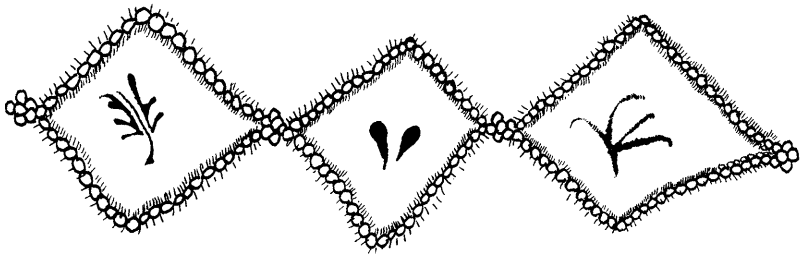
「障害」のある息子との日々を楽しむ……………徳田 茂…(11)

研究はやっと始まったばかり

—これを機に「初心に帰って」もうひとがんばり……………丸山 尚子…(19)

園長室の窓から(4)

保育環境について考える(3) 飼育動物……………原口 純子…(27)



トボスにおける発達 第四回 身体知の成り立ち……………無藤 隆… (35)

ある日の育児日記から⁵⁸⁾……………佐藤 和代… (43)

『十里霧中』——息子たちのイギリス公立校体験記(1)——…豊田 一秀… (44)

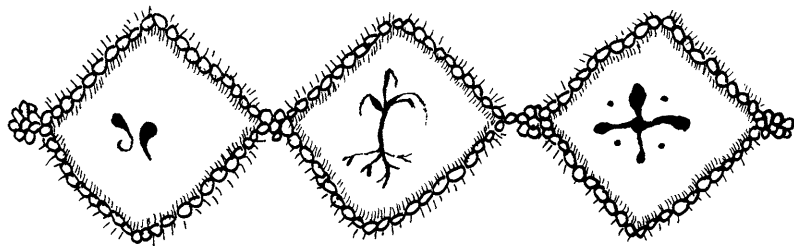
鏡の世界の子どもたち ——左利きの幼児の保育をめぐって——齋藤 薫… (49)

子どもたちへのまなざし⁵⁵⁾ おばあさんうさぎのこと……………松井 とし… (56)

二つの保育形態を体験して ——保育者として思うこと——高橋 陽子… (58)

表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ

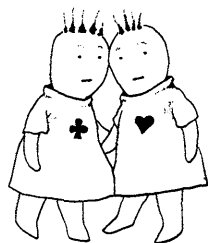
編集委員・田代 和美／本田 和子
榊田 正子・伊集院理子
編集部・仲 明子・大沢 啓子



〈巻頭言〉

「教育」 過剰の教育不在

小川 博久



この表題は二十七年前、私が北海道教育大学釧路分校に勤めていて地元の高等看護学院の学園祭の講演会に招かれたときの表題である。その時の講演草稿を今見直してみてあまり事態が変わっていないのを痛感している。

いや私の頭の中が少しも進歩がないのかもしれない。とはいえ事態はむしろ悪くなっているといつてよいのではないかとさえ思っている。

私はそこで、受験熱は益々加熱し、世の親達は自分の子どもの将来を考え、早くから自分の子どもの「教育」に力を入れている。しかし、一方では、多くの若者達は「教育」されることを喜ばない。あるいはうとましく思

い、登校を拒否したり、学ぶことに意欲を喪失したりしている。この事実は自らが自らを望ましい方向へと形成しようとする意欲、本当の意味での教育＝自己形成が忘れられているといったことを述べたのである。

今、このことを自ら実感しているのは若者達ではないだろう。そして自己形成の場はいわゆる「教育」のためにつくられた場所（学校）やこの物質的豊かさを謳歌している日常的な都市空間にはもはやないと感じてしまっているのではないか。だからこそ阪神の大地震後の災害援助の場に自らを立たせたり、狂信的なオウム集団の中に解脱の場を求めたりしたのではないか。この二つ

は全く反対の方向性をもちながら、自己形成の場を日常生活や学校に求めることを止めてしまっているという点では同じではないか。自己形成の動機を失った人間に情報を注ぎ込むという形の「教育」は教育不在の象徴ではない。

われわれは「教育」の教育たるゆえんを改めて求めるためには、「教育」の場としては辺境に位置づけられている幼児教育の現場で、集団生活の中での主体的動機形成の場である遊びを人間形成の原点としてふたたび見直すべきではないだろうか。

遊びは幼児自身の興味に基づいて活動が起こされる。遊びに取り組もうとする時の幼児は自分の興味の対象を目でとらえ、手にふれて活動を始める。その対象は自分の好きな人間であったり、好きな遊具や素材であったり、自分の心ひかれる場所であったりする。自分のしたいことを選ぶ幼児の目は登園直後の姿にみられる。

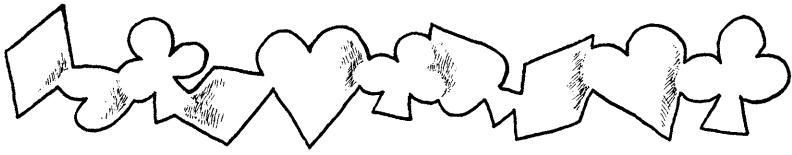
発動された幼児の心のうごきの中には、何気なく、無作為に生まれたものもあるけれども、園生活のどこかで

心ひかれた他児や保育者の遊びの姿への憧れ、がひそんでいることも少なくない。その憧れを実現しようとする手がかりが好きな遊具であったり、好きな友達や保育者であったり、憧れる遊びが展開されたことのある場所なのである。

しかし憧れを実現したいと思う幼児の取り組みはそう簡単に実現はしない。途中で断念してしまうことも多い。もしこうした幼児の思いを読みとり、憧れが実現するよう援助してあげること、幼児達一人ひとりが乗り越え体験をし、自分の物語りをつくりあげることができる。もしこんな機会が幼児に与えられたら幼児の自己形成の場として保育の重要性ははかりしれない。

しかし、一方では、エンゼルプランといった名目で駅前保育所が広く宣伝されている。働く母親にとって便利だということだけが強調され、そこで生活する幼児のあり方が問題にされることはほとんどない。幼児のくらしやいのちの豊さを保障することが教育の原点であるはずなのだが。

(東京学芸大学)



忙中の読書

—「ソーシャルロールバリゼーション入門」を読む—

津守 真

この文章が印刷されるころには、OMEP世界大会は終わっているだろうが、これを書いているいまはその準備の忙しさのさなかにある。そんなときにも、絶えず送られてくる新しい書物を手に取ると違う世界が開かれて、事務に固く滞ってしまいそうな心が柔らかくされる。

その中の一冊に、富安芳和氏が訳された、W・ウォルフエンスバーガー著『ソーシャルロールバリゼーション入門——ノーマリゼーションの心髄』（学苑社 一九九五）がある。一見難解なのだが、つい引き込まれて読まされてしまった。

著者は、見る者と見られる者との、ほとんど超えがたい立場の違いを問題にする。

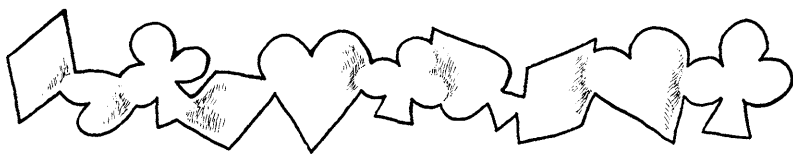
何かを「する」側にとっては、自分の立場はあまりにも自明なので、「される」側の疑問や感情に気がつかない。先生と生徒、指導する者と指導される者、声をかける者と、声をかけられる者というように、それは生活の至るところにある。障害者とのかわりにおいてこのことは顕著であり、根本的である。

普通にことばを話したり歩いたりする人は、それだけで獲得している特権に気がつきもしない。ことばを話すことができず、歩くことができない人が、社会生活の隅々まで低く見られている残念さを考えもしない。そのうちに、それすらも無感覚になって、人間関係が固定してしまう。

この書物の著者、ウォルフエンズバーガーは、ノーマリゼーションという語を最初に使った人で、一九七二年に「ヒューマンサービスにおけるノーマリゼーションの原理」という書物を書いている。しかし、ノーマリゼーションという語がいくつもの疑問や誤解を生んだので、それに代えて「ソーシャルバロリゼーション」という語をこの書物で提唱している。

この書物の第一章で、彼は、人間の知覚を問題にする。





知覚は本来評価的なものであって、「価値を伴わない知覚」はありえない。他人から否定的に知覚され、評価されるとき、彼はそれを「価値の引き下げ」と呼ぶ。「それは、知覚されている人に、本来備わっているもの」ではない。この書物は、この考えを終わりで貫き、いろいろの角度から検討する。それも、障害をもつ人々の生活の質を向上させるための社会的実践を基盤としてである。

人間の社会には、どこにでも、「価値を引き下げられている」一群の人々がいる。その理由は、「最も本質的には、人間は不完全だからだ」「すなわち、人間は、非常に小さな有限の被造物であり、神ではなく、また決して神にはなれない存在だからである。」と著者は言う。

人は「富と物の所有」「健康と肉体の美」「若さと新しさ」「適応、自立、知能」「生産性と物質的な貢献」に高い価値をおき、その逆のものの価値を引き下げる。そして、その人々を社会の中で低い地位に追いやり、軽蔑する。また、その人々を哀れみの対象として見る。慈善の対象として見るときには、人は、その人の世話をしなければならぬという義務を感じるが、喜びも、肯定的感情ももたない。自然の人間関係は「有給で雇われた人」との「人工的に買われた」関係に置き換えられる。

「価値を引き下げられた人」の側から言えば、「個別性を剥奪され、画一的な団体処遇を受ける」「欲しているときに欲しているものを、しかも欲している仕方を得ることはでき

ない」「サービスの名の下にいたくはないところに入れられてしまう」。

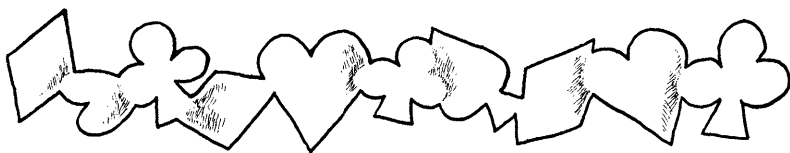
このことが、この著者の言うヒューマンサービス訓練プログラムの基本である。

こうして、「可能なかぎり文化的に価値のある手段により、人々、ことに価値の危険に瀕している者たちのために、価値のある社会的な役割の可能性、確立、増進、維持、ないし防衛」をすることが、ソーシヤルバリゼーション (valorizing 価値を高めること) である。

具体的には、「価値のあるコミュニティ内の普通の住宅で、価値のある人々とともに暮らし、価値を引き下げられない仲間と一緒に学び、普通の人々と同じところで働き、そして、作業所や、レクリエーションや買い物や、社会のメンバーが行っているその他すべての活動に、肯定的な仕方に参加すること」である。価値を引き下げられた人々は、ときには、普通に必要とされる以上に、スーツを着てネクタイをしめるとか、子どもならば、可愛らしい洋服を着ることが、他人の人から価値を認められるのに重要になることもある。

「ノーマリゼーション」という語を使うと、「それを聞いたとき、ほとんどの人々が即座に、自分たちがそれが意味することを知っていると思ってしまった」。それで、自分たち





で勝手に、常識的に、「普通」ということを解釈した。

実際、ノーマリゼーションの名の下に普通の規準に近づけるために、本人の側からは意味のない訓練や教育を正当化した。

障害をもつ人が、自分にとって意味のあることを与えられていないために、「乱れた行動」をしたり「絶え間ない動き」をすることも多い。ある強度の攻撃的で破壊的な行動を示していた知的障害の男性が、長年の間の行動介入プログラムや薬の投与が効果がなかったのに、グループホームに移されて間もなく、「新しい人間」が誕生した例を著者はあげている。彼の以前の不適応行動はほとんど完全に消失し、協力的で自己志向的になったという。こういう例は、大人でも子どもでも、数え切れないくらいあげることができるはずである。人間には意味のある生活文脈が必要なのである。

この書物は、読みやすくはない。むしろ難解である。しかし、よく読むと、実際にはごく当たり前のことを述べているにすぎない。そして、それこそが実際には実現することが難しいのである。現代はこの考えを基本にするヒューマンサービスの専門家を必要としている。

(愛育養護学校)

保育学文献賞を受賞して

「障害」のある息子との日々を楽しむ

徳田 茂

思いもかけぬ幸福

人生には、ごくまれに、思いもかけない幸福な時というものがある。今度の保育学文献賞の受賞は、まさにそのようなものであった。

ダウン症で知的「障害」をもつ長男・知行^{ともゆき}との二十年間の歩みを、私は一冊の本にしていただいた。それも、大学で心理学を学んでいた頃からよく知っ

ていた川島書店の手によって、である。これだけでもう、私は大いに満ち足りていた。二十年余りずっとため込んでいたものを思い切り放出した、という心地よさもあった。

本のタイトルは、四転五転したあと、結局『知行とともに——ダウン症児の父親の記』（川島書店一九九四）となった。単純といえば単純なタイトルであるが、私はこのタイトルが気に入った。

職場の仲間が中心になって「出版を祝う会」を開いてくれ、百名近い人たちが集まってくれた。病気のため入院していた、知行の祖母（妻の母親・私にとっては義母）もこの会に出席のため、病院からかけつけた。この人がいなかったら、私たちの二十一年間はなかった、と言っても過言ではない。その義母が大勢の人たちのなかでうれしそうな顔をしているのを見て私は、少しは恩返しできたかもしれないと思った。

右のようなことだけで、私は十分に満足していた。ところが、である。ある日突然、保育学会の事務局から「受賞」の知らせがあった。舞い上がった私は、正確な賞の名称も確認しないまま受話器を置いた。「よくわからないけど、保育学会から賞をもらえるらしい」と言うと、それだけで職場の仲間は喜んでくれた。おたがい、いい加減なものである。でも、そんな雰囲気って、わかってもらえると思うのだが……。

ともかく、びっくりしたし、うれしかった。自分なりに精一杯書いたとは言え、それがほかの人たちに認めていただけるかどうかは、また別の話だと思っていたから、今回の受賞は、私には格別の励ましとなった。

学力とは無縁のところ

ところで当の知行であるが、彼は本の出版の時も受賞の時も淡々としたもので、「それがどうした？」と言わんばかりである。私の浮かれ気分などに少しも左右されることなく、知行はいつものペースで、のんびりとした日々を送っている。

知行は今二十二歳だが、ことばはほとんど喋らない。よほど必要だと思った時以外は、口をきかない。そもそも喋りことばをほとんど持っていないのである。必要な時は、一つ二つの単語を口にする。日常的にはだいたいそれでいけるのである。

彼は、いわゆる学力というものは、ほとんど無縁である。読める字はたいへんに少ない。書ける字はもっと少ない。と言うより、自力で書けるのは、「とくだともゆき」と「CHECKERS」と「光GENJI」くらいのものである。あとの字には、そもそも関心が向かないのかもしれない。計算の方も、からっきしだめである。「一プラス一は？」と問われても、彼は、「困ったなあ」という顔をするばかりである。

こんな風にしてできないことをあげていくと、紙がどれだけあっても足りないほどだ。しかし、彼は平然としている。悠々としている。

読み書きができなかったり計算ができなかったりしたのでは日常生活ができない、と考えるのは、誤りである。ひょっとしたら、今の学校教育は、「学力、学力」と叫びながら子どもたちの心を殺しているのではないか。学力（それも受験の学力）がない人と人として生きていけないように思わせて、子ども

ばかりでなく、親の心までも殺しているのではないか。学力とは無縁の生活を送ってきて、今のんびりと自分らしく生きている知行を見ていると、つくづく今の学校教育が奇異なものに見えてくる。

では彼はどんな日々を送っているのか、その一端を紹介しよう。

彼は現在、私と同じ職場で働いている。ひまわり教室という、心身障害児の通園施設である。通ってくる子どもは、大半が学齢前の子で、「障害」の種類も程度もさまざまである。今は十一名の子が通っている。

わが家は松任市まつとうしという、人口七万人足らずの小さな町にある。ひまわり教室は金沢市にある。彼は毎朝、松任市にあるわが家から金沢のひまわり教室まで、一人で通っている。「字も読めず、計算もできないのに!？」と思う人がいるかもしれないが、実際に知行は毎日通っている。それも、松任駅から金沢駅まではJRの電車に乗り、金沢駅からひまわり教



生活の中で、モデルを示したり実際にさせてみたりした。このやり方は知行にはよかったようで、けっこう意欲的に挑戦し、そして力をつけていった。

銭湯へ入るためには百円玉三個と十円玉一個が必要なことも、時々乗って帰るバスの料金が「百円玉三個と十円玉三個」であることも、いつの間にか覚えた。

彼はまた、五人分の缶コーヒーを買うすべも発見した。なんと彼は、百円玉一個と十円玉一個の山を五つ作ったのである。その金をまとめて買いにでかけた。これには心底感動した。ちなみに、その日五人分の缶コーヒーを買いにでかけたのは、お客さんが来ていたのを見て、お客さんと家族におごろうと思いついたことであつた。こんなことを思いつく知行に、私はホレボレするのである。

知行はキョンシーが大好きである。どうも彼はキョンシーがこの世に実在していると思っっているようである。キョンシーが大好きな知行は、その映画

のビデオを見たい一心で、レンタルビデオ店からビデオテープを借りることを覚えた。今ではごく当たり前の顔をして、カードを持って借りにでかける。たまに返し忘れて、延滞金を七千円も払わなければならぬということもあつたが、これも愛嬌である。

感謝しながら、日々を楽しむ

『知行とともに』にも書いたが、二十余年前に彼がダウン症だとわかった時、私は激しく絶望し、自分の人生はもう終了だ、と思つてしまった。大学の頃から「障害」児の施設に出入りし、卒業とともに「障害」児施設の職員として働いていた私は、「自分は「障害」者の理解者である」と思い込んでいた。その私が、である。

まさか自分の中にそのような醜い差別心があるなどとは、思つてもみなかった。それだけにショック

だった。意識の上では理解者、無意識の世界では醜い差別者。この驚くべき矛盾。

それから、私の闘いが始まった。自分自身との闘いである。すぐには変わることはできなかったが、少しずつ私は変わってこられたように思う。それは、ほかでもない知行のおかげである。今は、知行という素晴らしい青年の父親であることに深く感謝している。私は無神論者であるので、神に感謝するということにはならないが、しかし、知行という子を授けてもらえたことについては、目には見えない何かしら大きなものに対して、深く感謝する。

もちろん、知行とのつき合いがいつもいつも順調というわけではなかったし、今でもそれは変わらない。また、知行と生きてくることは、私にとって、まわりとの闘いでもあった。それは並みの闘いではなかった。その闘いは、私をして、「障害」児だから不幸なのではない。「障害」を理由に差別する人々の中で生きていかなければならないことこそ

が、「障害」児の不幸なのだ」と確信させるほどのものであった。

しかし私は、そうしたことなどもすべて含めて、知行とともに生きてこられたことに、それを通して自分が少しましな人間になれたことに感謝している。

よく「子育て」とか「人を育てる」とか言われるが、その内実は、「ともに育つ」ということなのではなかるうか。親子について言えば、「親育ち、子育ち」ということではないだろうか。実は知行の下に妹と弟がいるが、この子らとのつき合いを通して、私はたくさん教えられ、学んだ。そして、育ててもらった。大人が一方的に子どもを育てる、親が一方的に子どもを育てるということは、ほんとうはないのではないか。わが子三人との日々を振り返って、つくづくそう思うのである。

幸いなことに、知行と生きてきた二十余年の間に、世界的に「障害」者理解の気運が高まり、また

私たちのまわりでもずいぶん様子が変わった。息がしやすくなったし、肩ひじをはらなくてもいいようになった。金沢市や松任市などで、私たちのあとに、百組を越える「障害」児の親子が地域の小学校へ通い、けっこうおもしろい暮らしを展開している。もちろん、トラブルはしょっちゅうある。ある意味では好ましいことだと思っている。ぶつかり合い、悩み合いながら、人と人はわかり合い、育ち合っているのであるから。

いつの間にか二十年余りもたってしまった。か細くて折れてしまいそうな知行が、今ではまるまるとしたアンコ型の体をゆすって歩くようになった。体とともに（!?）心も大きく成長した。味のある青年になったな、と思う。しっかり自分を持っていて、ゆったりとしたペースで生きている。なかなかユーモアもある。そんな彼との暮らしが、私には楽しくてたまらない。

これからも彼を人生の同行者として、のんびり楽

しくやっていきたいものである。もっとも、知行の方は「うるさい親だ」と思っているかもしれないので、あまり彼に迷惑をかけないようにしなければ、とは思っているのだが。

（ひまわり教室）



研究はやつと始まつたばかり

——これを機に「初心に帰って」もうひとがんばり

丸山 尚子

はじめに

この度は、『手が育つ・子どもが育つ・生活をつくる』（京都法政出版 一九九二）が思いがけず榮譽ある賞を受賞致しまして、ふと初心の頃を思い出しました。

私が「手の労働」を研究テーマと決め、「手」について研究を始めたのは大学院修士課程一年の時でした。エンゲルスの「猿から人間になるに際しての労働の役割」を読み感激したのがきっかけでした。もう三十年以上も前のことです。

当時私は（今でもそうですが）、何事においても、「はじめに何があるのか」ということにとても興味があり、こだわっていました。これから自分が長いことつきあうことになるであろう「人間」は、どこから、どうしてやってきたのか、何が人間のはじまりだったのか、何によって発展・発達するのかを知りたがっていました。

そんな時出会ったのが、エンゲルスの論文でした。

当時いろんな意味で影響を受け、わたしの発達研

究の「原点」ともなった「ソビエト心理学」のとくに幼児関係の文献にしばしば登場する「手の労働」に心ひかれていたこともあって、私の関心は「手」と「手の労働」一色になりました。

卒論で、下肢に障害をもつ子どもたちや大人の私たちを対象にして、「足」について考えたことも、「手」にいきつくべき条件となっていたかもしれないません。

ともあれ、こうして始まった「手」の研究でしたが、その頃は、「手の労働」などということばはまだまだ珍しい時代でした。

『「手の操作」、手の動作』、『手の作業』とどう違うの？、「手の操作」じゃどうしてだめなの？」などと聞かれ往生したものでした。

第一自分自身はつきりわかっていないのですから、説明を聞いた方もわかるはずがありません。説明すればする程、かげんそんな顔をされたものでした。

「手の労働」ということは響きと新しさに自己満足していた面がないでもなかったように思います。「ソビエト心理学」や「ソビエト教育学」の文献をたよりにことばを整理し、理解することで精一杯でした。

やっとわかりかけた頃、「手でいろんなものをつくったり（つくる）、お手伝い等で仕事をしたり（はたらく）…する活動」といったら、「手だけではできないんじゃないの。だとしたら『目の労働』、『足の労働』もあるというわけ？」などといわれ、「うーん」。

とにかく、その度にしどろもどろになったものです。

「だめじゃないか、初歩の初歩があやふやじゃ」と、とくに「ことば」の使い方にきびしい松本金寿先生（一九八四年に逝去）には叱られてばかりでした。

しかし、今考えるとあの頃が一番真剣に勉強して

いたように思います。

多くの方に支えられて

はじめの数年（在仙台時代）は「手を使ってする活動と認識の発達の関係」について、幼児を対象に、実験の中で捉えることを主にしておりました。

やがて、一九六七年、徳島大学教育学部幼稚園教員養成課程に教員として就職、「保育」という日常場面での「手」や「手の労働」に関心を持たざるを得なくなりました。やっと徳島に慣れ、なじみができはじめた頃、保育所通いをはじめました。日常的な生活の場面での子どもの観察を通して、「手」の発達の過程を捉え直したいと思ったからでした。

ところが、しばらくして（一九七〇年代の初め）、ご存知のように、「子どもたちの手の異変」（不器用になった、手が虫歯にかかった等と表された）が多くの人たちによって指摘されました。やがて、足の問題や身体のおかしさ、それらと併せて指

摘された心の問題もありました。

「手」の発達課程を捉えるのみでなく、「手」を育てる課題が切実な問題意識となったのはその頃からでした。

生活を支え、生活をつくりだす「手」という視点から「手」を見直したい、そうした「手」こそ、子どもたちに育てなければならない「手」なのではないか。その「手」は、やがて、子どもたちのところを育て、生き方を支え、生き方をつくりだすのだと考えたのでした。

ちょうど発足したばかりの「子どもの遊びと手の労働研究会」に入会（一九七三年頃）、間もなくして保母さんたちとの「研究会」（「とくしま手の労働研究会」、一九七八年秋発足）もでき、保母さんたちによる「保育」との共同研究体制ができあがりしました。

やっと、本格的な「手」、「手の労働」の研究のはじまりでした。

月一回の研究例会は楽しく、多芸多才な保母さんたちに圧倒されながらの日々の中、いくつかの成果（注①・②・③）も出すことができ、充実した中で研究をすすめることができました。

思えば本当に多くの方々にご指導とお世話をいただきました。とくに恩師の松本金寿先生、宮川知彰先生、共同研究者の近藤隆子さん、そして保育の場から多くのヒントを提供して下さりながら、実際に保育の場で実践して下さった「とくしま手の労働研究会」（現在「もみじの会」）のみんな、本当にありがとうございます。これを機会に、感謝申し上げます。

子どもたちにも感謝

またこの機会に実験や観察、保育に際し、協力してくれた多くの子どもたちにも感謝しなければなりません。子どもたちの協力がなければ私の研究は成り立ちませんでしたから。

その子どもたちの中には、わが家の娘たちもいます。

私の「手」の発達の研究に、少なからぬヒントを提供してくれたのは、わが家の三人の娘たちでした。

実験の開始前はもちろん、真つ最中にも、家に帰ると、「実験の材料はこれでいいか」、「どんな道具がいいか」、「観察のポイント？」等々まだ小さかった娘たちを相手に、ああでもないこうでもないとしてみたものでした。

ビデオもたくさん撮りました。記録もいやという程とりました。

いい道具（はさみやナイフ等）やおもしろい玩具を探して、あちこちの文房具屋さんや金物屋さん、おもちゃ屋さんをたずね歩き、おもしろそうな玩具やこれぞと思う道具を見つけると、さっそく買って帰っては子どもたちと夢中になって（夢中になったのは私だけだったかも）使って遊んだものです。⁽⁴⁾

子どもたちからの宿題

——娘たちの質問にも答えられなくて

そんな母親の姿を見て、不思議に思ったのでしょうか、ある日、長女が（確か五、六歳の頃だったと思います）。

「おかあさん、おかあさんのおしごとはいがくのせんせいでしょう？　どんなおべんきょうをおしえているの？」と聞いてきました。

「おててのおべんきょうよ」と答えると、長女は、「ふうん」といいながら自分の手を見ていました。

「そのおててがね、どのようにして、おおきくなるのかなあとか、どうしたら、かしこいおててになるのかなあとかね」というと、長女は、

「そんなことかたんかんたん。ごはんをたくさんたべればいい、それからおててのたいそうをする」といいました。

「それもいいね、だけでもっとたいせつなのはね、しっかりおててをつかってあそぶこと。それからお

てつだいもしないとね。おかたづけをしたり。」

「おてつだいたら、どうして、おててがおおきくなるの？」

「おててはね、まいにちいっしょうけんめいつかうとおおきくなるの」

「ふうん、よくわかんない」

やがて小学生になり、わが家においてある手の絵本や子ども向けの手の本、手の進化の漫画等を片っ端から読みだした長女が小学校二年生になって間もない頃、「手のことはわかるけど、おさるさんがでてくるところがさっぱりわかんない」といって聞きにきました。

私は待つてましたとばかりに、手の大切さや仕組み、そして手の由来について得意になって話しました。いつか自分の子どもたちに、手の話をするのが夢だったその頃の私は、思いきり熱弁をふるったのはもちろんのことです。

私の話に上の二人は興味をもち、いろんな質問を
してきました。

「指は五本と誰が決めたの？」

「お兄さん指よりお母さん指が短いのは、なんで？」

「この間行った動物園のおさるさんも、もうすこし
したら二本足で歩けるようになるの？」 などなど
。。

ところが、突っ込みのするどい次女（当時小一）
がいきなり、

「お母さんの子どもの頃にはしっぽがまだ残ってる
人やまだしっかり立てないような人とかがたくさん
いたん？」と聞いてきました。「大昔」の意味がま
だまだ飲み込めなかったようです。

いくら説明しても「わかんない」。

これにはすっかりまいってしまいました。

彼女たちに納得のいく説明がつかないままに、そ
の時も終わってしまいました。

そんなことから、いつの日にか、彼女たちも含め
て子どもたち（小・中学生）に納得のいくように手
について語る本を書かねばと思うようになりまし
た。手のいろんなことの説明ができるような、さら
には、手が人間をつくり、手が人間らしい生活の基
となるのだということ、その「手」を育てるのは、
お手伝いをしたり、友だちとたっぷり遊んだりの、
ごく普通の楽しい毎日の生活であること、その中
で、「手」だけではなく、こころも豊かに、足も腰
も丈夫に、全身を育てることが大切であること、こ
うして育った手が、人間らしい生活をおくり、自立
的に生きるもとなるのだということを伝えたいと
思ったのです。

なによりも、「手を育てる」主体である子ども自
身に精一杯伝えたい、そう思ったのでした。

これは子どもたちから課された宿題のように思え
ました。

これからのこと

——子どものための「手の本」が書ける日まで

しかし、幾度か思い立ちながら、未だに果たせな
いままです。子どもたちと真っ向から対するにはま
だまだ未熟、見すかれそう、もっと深めねば……と
思ううちに日がたってしまいました。

一つのこと打ち込んだといえは聞こえはいいの
ですが、要するにこれしかできなかったのです。し
かもほんの入り口のところにとどりついただけ。実
際のところ、研究はいまやと始まったばかりなの
です。

もう一息、がんばらねば。文字通り「初心に帰っ
て」励まねばと思います。そしていつの日か子ども
たちからの宿題をはたすことができたらと思いま
す。それは、はたして、いつのことになるのでしょ
うか。

さて、「手」に関する研究についてを中心に述べ
てきましたが、その周辺の問題として「子どもたち
の生活」も大切です。

私は、「手の異変」が指摘されて間もない一九七
五年、共同研究者とともに、徳島の子どもたち約七
千名を対象に「生活実態調査」を実施しました。そ
の後、ほぼ十年毎に、生活の実態調査を行っていま
すが、この度（一九九三、一九九五年）、三回目の
調査を実施しました。

『手が育つ・子どもが育つ・生活をつくる』では、
一回目（一九七五年）と二回目（一九八三年）の結
果とその間の変化を、「生活をつくる」（Ⅲ部）とし
て紹介させていただきます。⁽⁵⁾

現在三回目の調査の集計・分析の真っ最中です。
今回の調査では、一回目の調査において小学生だっ
た「徳島の子どもたち」と、「お母さん」として約
二十年ぶりに再会することになります。いろんな意
味で感慨深い三回目の調査ですが、二十年間の生活

の軌跡を捉えることができたと思っています。

この仕事が一段落したら、再び「手」に直接関わる研究に復帰する予定です。

この年齢になって、やっと人並に、「初心に帰る」ことができるような感動を覚えました。

通常、受賞は、「よくがんばりました」、「よくできました」という意味です。

しかし、私の場合は、「もうひとがんばりしよう」、「もうひと仕事しよう」という意味と受けとめさせていただきたいと思っています。なにかにかこつけてはさばりたい私にとって、ガッンと大きな一発ともなり、大変大きな励みともなりました。

最後になりましたが、会長の岡田先生をはじめ日本保育学会の皆さまに、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

(徳島大学)

注

(1) 丸山尚子、とくしま「手の労働」研究会編 一九八四

『手で考える』 黎明書房

(2) 同右 一九八四 『0、5歳児の手を育てるカリキュラム』 黎明書房

(3) 子どもの遊びと手の労働研究会編 一九八六 『あそ

ぶ手・つくる手・はたらく手』 ミネルヴァ書房

(4) そんな中で、「はさみ」についてまとめたものが「はさみに挑戦」(『手で考える』に所収 249-262

頁)。

(5) 詳細は丸山尚子他 一九七七(一九八七に改訂)

『徳島の子どもたち』・一九八七 『はばたけ子どもた

ち・徳島の子どもたち・Part 2』共に第一出版。

保育環境について考える(3) 飼育動物

原口 純子

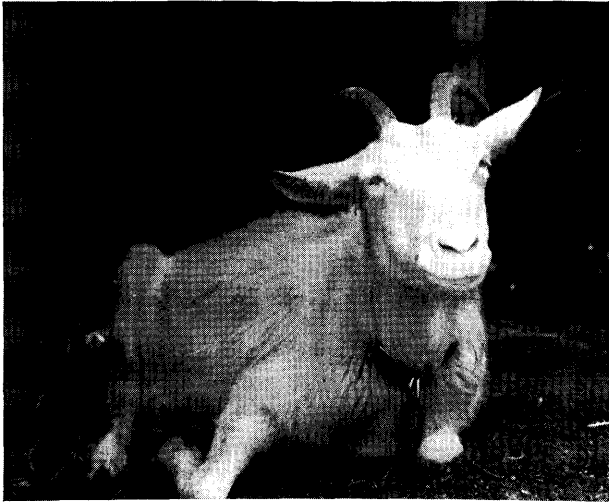
ヤギのいる幼稚園

かつて勤務したO園では、園庭の北東の角にヤギ小屋があつて、雌ヤギのメエ子を飼っていました。いかに当地が田舎とはいえ、公務員宿舎ビルのただ中にあるこの地域で、ヤギを見る機会ほとんどありませんでした。ヤギの他に雑種の雌犬のペロ、ガチョウの花子と、ジャンボ母さんという大きな白ウサギとチャボのコッコさん一家が園庭に住んでおりました。アパートでは金魚や小鳥以外には動物を飼うことが禁止されていることもあつ

て、園が休みの日曜日や祭日になると近所の親子連ればかりか、中には車に乗って、わざわざ遠くから動物を見に来ている家族が結構いました。二、三歳の乳幼児から小学生に至るまで小屋の前にしゃがみこんでなかなか動かないのです。今日盛んに「地域に開かれた幼稚園」ということが叫ばれていますが、ヤギのいたミニ動物園のような幼稚園は文字どおり地域に開かれていたし、沢山の地域の人々に喜ばれていました。

またある年、入園後しばらくして、四歳児の母親が、

「昨年の十月頃に息子を連れて、来年入る幼稚園を決めるために、あちこちの幼稚園を見学して歩いたのですが、息子にどの幼稚園がいいかを聞いたところ、即座に



▲ヤギのメエ子

『ぼくはヤギのいる幼稚園に行きたい』と言ったので、こちらにきめました。」と話されたことがありました。何百万もする立派な総合運動遊具施設もたった一頭のヤギに勝てないことが分かります。それほどに、動物は子どもにとって魅力のあるものと言えましょう。

教育長さんのチャボ

幼稚園で飼育を始めたきっかけは、教育長さんにチャボをもらったことに始まりました。

その昔、当市がまだ合併前の村であった頃、時の教育長さんは、中学校の校長を定年になられた方で、人を育てることに熱意のある方でした。ある日教育長さんは、村立の五つの幼稚園を視察して回られ、動物を飼っていないことに気づいて、自分の家で飼っていたチャボに卵を抱かせて雛をかえし、自ら各園に一羽ずつ分けて下さったのです。「幼稚園で動物を飼ってごらんない、動物は子どもにとっても良いものです。」と言われました。教育長さんは言葉で「幼児教育は大切です」とか、

「しっかり良い園の経営をしない」とは一言も言われませんでした。が、どの園も、本気で幼児に良い経験を持たせたいと意欲を持った事を思い返すと、我々はチャボに教育され、チャボを配った教育長さんは本当の教育者であつたと思います。

保育と飼育動物

しかし、どうして幼児は生き物を好み、何が幼児を育てるのでしょうか？

それは動物が、生きていて世話がかかる事につきるのではないのでしょうか。保育に効果を持つ動物は、世話のかからない、手軽な金魚や小鳥より、重くて、臭くて、手間や世話のかかる動物なのです。例えばモルモット、ウサギ、チャボ、アヒル、ガチョウ、犬、ヤギ等なのです。

ではなぜ生きているものは人を育てる力を持つのでしょうか。一つには、生命の持つドラマの感動、例えばチャボであれば卵を生む、ヒヨコがかえる、成長する、

死ぬこともある等です。なるほど、年とった雄のチャボが一匹の時には全然人気がありませんでしたが、となりのウサギの親子の小屋には幼児が毎朝餌をやりに来るのです。チャボの世話をしたい幼児はいませんでした。と



▲チャボのコッコさん一家

ころが、雌のチャボをこの春入れるとヒヨコがかえり黒山のひとだかりになりました。命の誕生の感動、ヒヨコの愛くるしさ、チャボ親子への家族としての共感のようなものが人気を集めています。

第二に飼育動物は人を受容してくれるからではないでしょうか。

ウサギやモルモット等の小さな動物はあまり人見知りせず、どの幼児でも平等に受け入れてくれます。幼児はもとより大人でさえ人は動物を見ると餌を与えたくなくります。動物は満腹でない限り、与えた餌をムシヤムシヤと食べてくれます。食べてもらうととても安心し、うれしい気持ちがあります。餌を与えずにただ見ている時より、餌を食べてもらった時の方が充実感があるし、動物と仲良くなれたような気がします。

また、動物が言葉と話さないのも、良いのだと思います。動物は何も言わずだまって、じっとして、或いはかけずり回っているだけです。人が不安な時話しかけられるより、そこに居てくれるだけでいいということもある

のです。

こうして動物は人間の気持ちを受入れ、癒してくれている部分があるように思います。それは水槽の金魚でもカメラでも言えることです。

入園間もない不安定な幼児の気持ちを、ウサギやモルモットは良く受け止めてくれます。人によって差別や拒絶をせず、もくもくと餌を食べてくれるウサギの替りをぬいぐるみのおもちゃが代用することはできないのです。特にふわふわしてやさしい小ウサギに友達との関わりの難しい幼児が支えられることは度々経験することです。

ままごとには食事場面が多く幼児は次々に教師に砂団子や料理を御馳走して、教師がおいしいおいしいと一生懸命食べてあげるのも、幼児の気持ちを受け入れる点において、飼育動物の餌と同じ質のものではないかと思えます。

第三に共に生きる仲間としての喜びがあります。

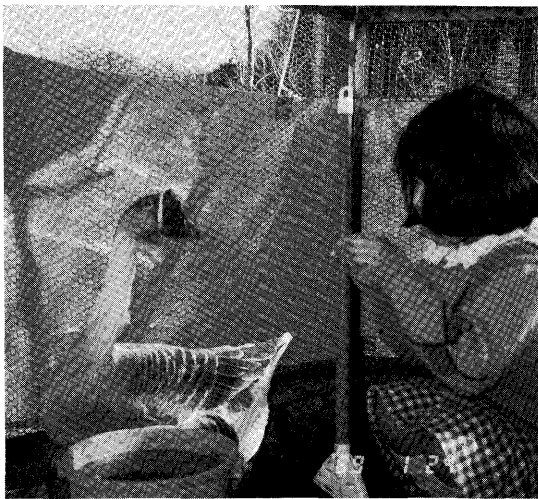
犬のペロを飼った年長のかえで組では、当番のグルー

プで世話をしていました。世話をする程に、なつき、犬との心のつながりができて、世話のやりがいのある動物でした。園外保育の時に、一緒に散歩に連れて行くと喜んでついて来ました。ペロは大変おとなしい雌犬で、吠えたり噛みついたりすることはありませんでした。餌は自分達の給食の残りから犬の食べられる物を取りだして与える等、幼児がいつでもペロを、クラスの一員として心に置いていました。しかし犬は毎日散歩が必要なため、PTAのボランティアグループが飼育活動を支えてくれましたが、幼稚園での飼育動物としては難しい面がありました。

幼児と心のつながりが深まる点では、年長のいちよう組が飼っていたガチョウは面白い飼育動物でした。人の顔を良く覚え、知らない人が来るとグワグワッと大声で叫びますが、常に世話をしている幼児や先生、ボランティアのお母さんが来るとうれいという表情で体をすりよせてきたり、羽をひろげてバタバタさせて喜びを表現します。大きな卵を産み、各クラスに分けてホット

ケーキを作って食べました。体も大きく存在感がありました。

気持ちの通じる動物はデリケートでもあり、年長向きかもしれません。



▲ガチョウの花子

第四に世話をし、愛する経験としての飼育活動です。

兄弟の数の少ない今日、幼児は親や教師、身の回りのすべての人から、常に保護され、愛される立場にあり、自分が能動的に保護し、可愛がるという経験は比較的少ないのです。

飼育動物は幼児が餌を与え、水を与え、フンの散らばる小屋の掃除をして世話をします。こうした世話をする立場が、生きるものへの思いやりや慈しみの心を育てるのです。

生きて動き回る小ウサギやヒヨコをかわいいと思ったり、自分のクラスで飼っている犬を大切に思う気持ちを経験できることは他には代え難いものです。

第五に当番活動について。

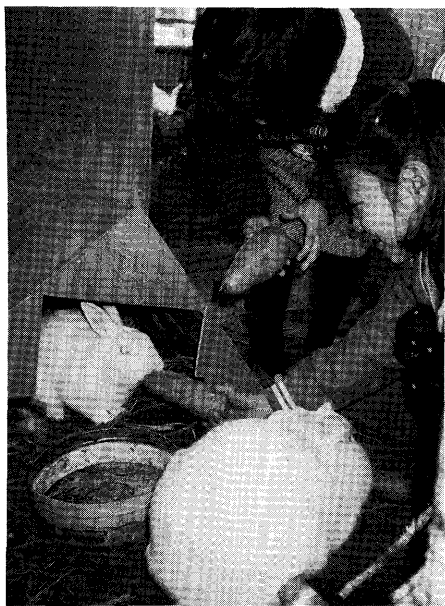
飼育というと即座に当番活動と思うほど、保育活動における飼育は当番や係り活動と結びついていました。動物がかわいいから飼う、というより、飼育は厄介でも当番活動を通して幼児を育てるのに有効であるから動物を飼うという時代もありました。しかし仕事を割り当てて

ローテーションで回して、動物に対する幼児の気持ちをかまわず、義務のように世話をさせるのでは、いたわりの気持ちも思いやりの気持ちも本当には育たないのではないかと近頃は思います。

今日私の園では、ウサギやアヒル、チャボなどがいますが、飼育当番活動というのはやめています。廊下に野菜をきざむテーブルの「餌づくりコーナー」が設けてあります。家からにんじんやキャベツを持ってきてむしったり、きざんで餌を作って、やりたい幼児が世話をしています。

金魚が好きな幼児は毎日金魚の餌やりに職員室に餌をもらいに来ます。

飼育当番を果たすことによって「私達が餌をやらないうとウサギが死んでしまう」という責任感を養うという考え方もありますが、五歳の幼児に命を預けることは無理があるように思うのです。責任感は飼育だけで育てる訳ではなくもう少しゆっくり生活全体の中で育てていけば良いと思います。



▲ウサギのジャンボ母さん

第六に命あるものがそこにいるということ。

飼育動物が何かに役立つと言うより、幼児が日常生活する環境にウサギやモルモットやガチョウ、金魚やザリガニ、ダンゴ虫、スズメやツバメ等、様々な生き物がいるという、その事自体が大切なことであると思います。ヤギは特段何もしませんでした。けれどもヤギがいるこ

とは園の幼児も教師も送り迎えをしている母親にも地域の人々にもとてもうれしいことでした。

こうした動物や虫や鳥に教師がどうかかわるかが大事なポイントです。

四歳児担任のM子先生は子どもの時から家で鈴虫を飼っています。家から飼育鉢に鈴虫の卵を持ってきて孵化させ、白いひげの小さな鈴虫の赤ちゃんに、毎日幼児と一緒に、餌のきゅうりの交換をしたり、霧を吹きかけて世話をしていたのですが、じっと見ていたY子がある日「これ鈴虫さんにどうぞってママがいったの」と言っ

て大きなきゅうりを持ってきました。Y子が家に帰って、お母さんに先生が鈴虫の世話をしていることを話していたことが分かります。

飼育のボランティアグループ

幼稚園のミニ動物園にヤギ、犬、ガチョウ、ウサギ、

チャボ等がいた時代、それは地域との共有財産のようになっていたのです。これだけのものをとっても園児と職員だけでは世話しきれず、PTA活動に自発的なボランティアグループができて、飼育を支えていました。犬の散歩、飼育小屋の掃除や修理、防寒用のビニールシート掛、休暇中の世話、その他園児や職員の手の届かない所を後ろから大きく支えてくれたのです。

このグループのリーダーをしてくださったNさんは若い時代をアメリカで生活された方で、「自分の子どもが幼稚園で世話になってるので、感謝の気持ちで、自分が幼稚園のために出来ることは何かないだろうか」という思いから「職員だけでは手に余る飼育の手伝いをしよう」と仲間を募ってグループを作ったのです。八人程のメンバーが集まり、お父さんも力を貸してくださいました。単なる有志のボランティアグループとしてではなく、PTAの任意サークルとして組織の中に組み入れて予算を付けた事はその後の活動を確かなものにしました。園としてもどんなに助かったかしれません。この時

以降この園の伝統的な活動となって、園長が替っても、ずっと継続されているのはありがたいことです。

おわりに

五月の始めから園の職員室のテラスの軒先にツバメが巣をかけて卵を産み、暖め、雛をかえしていました。親ツバメが忙しく子ツバメのために餌を運んでいる様子を幼児も先生と見守っていたのです。

けれども、来週には巣立つと思われた日曜日に、小学生がやってきて巣を壊して雛を持ち去りました。月曜日の放課後に一人の小学三年生が、虫の息になった七センチ程のツバメの赤ちゃんを手のひらにのせて返した来たのです。私は皆が巣立ちを楽しんでいたこと、親ツバメの気持ち、そして、雛は巣から出したら人間には育てられない事を話してそのまま持ち帰ってもらいました。小学生は今にも泣きそうな顔をして、死にそうなツバメの雛を持ち帰りました。彼が命の痛みを知ってくれればいいのですが。

（茨城県公立幼稚園）

トポスにおける発達

第 4 回

— 身体知の成り立ち —

無 藤 隆

子どもが感じ、考え、思う。また、他の子どもとともに遊び、やり取りする。それが上手に出来るようになれば、発達したと言う。では、何が発達したのであろうか。能力が向上したとも言える。だが、もう一つの答え方がある。子どもという主体とそれに関わっている対象を込みにして、一つの生態的なシステムの変化としてとらえる見方である。最小限のトポスとして成り立つ主体と対象、また主体と対象を支え含み込む地（地面であったり、床であったり）と空間がその最小構成となる。

では、子どもとその対象を関係としてとらえることで何が見えてくるのだろうか。ここでは、「身体知」という考えを取り入れて、考察したい。主体と対象との関係を身体の側からとらえるとは、主体の心の働きを具体的な対象との関わりにおける「動き」としてとらえることである。今、主体である子どもが何かをいじっている様子を見てみよう。ただ歩いているというのでもよい。体を床の傾斜や

ちょっとした障害に応じて姿勢を変えつつ移動させている様子が目に入る。小さい子どもにとって当たり前に成立することではない。経験を通して学んでいくことである。新しく幼稚園に入った子どもの移動の仕方を見ると、初めはおずおずとまわりを見ながら移動していく。歩けないということではなく、新しい環境での移動の仕方に習熟していく過程なのである。

だから、同様に、もっと知的とされる行動や遊びなどにしても動きとして見直すことができる。大型積み木を並べて、「基地」にしたり、「おうち」にしている場合に、個々の詳細な動きを見ると、積み木を持ち上げたり、降ろしたり、積み木に座ったり、前を見たり、そこに置いている紙で出来た棒をつかんで振ったり、などしている。それを全体として、「基地ごっこ」と呼ぶにしても、個々の動きはそのごっこそのものではない。様々な対象を用いた、その対象の特徴に応じた動きである。その動きの重なり

りが流れを構成して、ごっこという印象を本人たちにもまわりにも形成するのである。ここでも、そのごっこは個別の動きの流れ以外にはない。その動きに習熟することが、（少なくとも幼児期の）発達の問題だと見なすことが出来るのである。だとすれば、幼児の発達を支援するものとしての保育は、幼児の多様な動きを可能にするものだとと言えることになる。

身体知とは何か

子どもの動きとして対象との関わりととらえるとして、子どもの側から言えばそこで何が獲得され、習熟するのだろうか。能力とか、知識といったものに還元するのではないとすれば、「身体知」というあり方ではないだろうか。体得するという表現がある。高度な知恵とか悟りを意味する用法もあるが、運動などの場合のように、実際に体を使ってできるようになることを指すこともある。十分に言語化・

概念化できるのではないが、確かに、ある対象に対して高度な取扱いが可能である場合に、体得したと言えるのであり、知的な事柄に対してそのような状態に達すれば身体知と呼べることになる。

絵を描くとする。どのように描くのかを幼児は言葉に出来ない。だが、人を描くとなれば、頭足人と呼ばれるような形であれ、ともかく描くことができる。もっと上手になって目鼻立ちまで描けるとしても、これが鼻だとか、目だとかは言えても、なぜそのような形であるのかとか、どのような手順で描くのかについて語ることは難しい。だが、紙とクレヨンがあれば、たちまちの内に描いてしまうのである。



アフオーダンスという見方

この身体知という考えを最も組織的に検討しているのが、アメリカの心理学者故 J・J・ギブソンであり、その流れを汲む心理学の集団をギブソン派と呼んだり、その考えを、彼らの鍵となる概念である「アフオーダンス」という言葉を使って、アフオーダンス理論と呼んだりする。人と、環境に実在する物に対する身体的な関係を重視し、心をその身体と対象との関係の積み重ねとしてとらえるものであり、生態学的心理学と最近では自称している。そこでいうアフオーダンスとは、現実の物の持つ行為可能性である。例えば、椅子には座ることができる。それを見ている人に思わせるという意味で座るというアフオーダンスがある。横棒は高さに応じて、くぐるとかまたぐとかの可能性があり、アフオーダンスがある。

日本でのその立場のリーダーである、佐々木によれば（佐々木正人 一九九四 『アフオーダンス

——新しい認知の理論』岩波書店)、アフォーダンスとは、環境が持っている意味であり、価値である。その環境に生きる人にとって現れてくる行為の可能性である。アフォーダンスは事物の物理的性質と対応することはあっても、そのものではない。人にとつての環境の性質である。アフォーダンスは、人が主観的に構成するものではない。環境の中に実在する、人にとって価値ある情報である。価値とはその環境の中で対象との適切な関係を保って生きていけることを指している。

場所と物との関わり

実際、一つの場所には、それが家庭であろうと、幼稚園であろうと、実に多くの物が存在し、いかなる行為をしようと、多種多様な物への動きを要求されることになる。一つ一つの物への関わりを考えたとき、いかなる動きも可能なのではない。アフォーダンスは決定論ではないから、ある物があればそれ

に応じて特定の動きが求められるのではない。ある動きをするかしないかはそもそも自由である。その上、一つの物に対して少なくともいくつかの動きが可能である。

例えば、色鉛筆があり、紙が置いてあるとする。鉛筆の持ち方自体様々に可能である。「正しい形」であることもあるが、それは幼児などには難しいから、握って持つかもしれない。その上で、どんな絵にせよ、絵を描くかもしれない。だが、鉛筆を棒のようにして振り回したり、持って転がすこともあるだろう。机を叩くかもしれない。いくらでも可能な動きがありそうだ。だが、無限に自由なのではない。現実には多くの子どもが（年代に応じて）しそうなことに限定すれば、いくつかに限られるだろう。さらに、その動きは、鉛筆の持ついくつかの層をなす特性に応じているように思える。例えば、振るのは細長い棒に対してのことであり、転がすのは円筒を横にしての動きである。持つ形はいろいろとあ

るにせよ、いずれも指がそのまわりを握る細く長い物を長い時間、手と鉛筆と対象となる紙との角度の関係を安定させ、かつ必要に応じて腕を動かして鉛筆の先を移動させるときの形である。だから、ある種の動きの流れとして見たときに、どのように対象に対して働きかけ、ある形として・動きとしての関係を取り結ぶかは概ねある範囲に納まるように思われる。絵を描くという行為は、そのような鉛筆・クレヨンといった描画の道具と、描かれる場である紙などの平面との一定の関係を保つ関わりが基礎になる。

もちろん、絵は単に鉛筆を動かす行為ではなく、表現であり、何かを表すものである。だが、佐々木が指摘しているように、表現もまた、子どもが環境に関わる中で得た動きのある本質を描き出そうとしていると思える。「幼児が紙にペンで残す『痕跡』は、『なぐり描き』などと呼ばれて、ただの運動痕跡と考えられている。しかし、それは、『まっす

ぐ』、『曲がっている』、『始まりと終わり』、『閉じる』など、子ども自身が環境からビックアップした不変項を記録しようとした試みである。それらは、彼らが環境から得た情報をなんとか表そうとしたものである。」(P・109) この考えを延長すれば、例えば、幼児が「ざりがに」を描いているのは、ざりがにへの関わりの際の印象的な動きを表現していると思なせるのである。

多様な関わり

アフオーダンスは、決定的な関係ではないと述べた。箱があれば、必ず持つという関係を引き起こすというのではない。その上に乗るかもしれない。飛び越すかもしれない。テーブルにするかもしれない。一連の動きの流れの中である動きが優勢になるだろうが、しかし、決定はされず、別な動きが出てくる可能性は常にある。そこで一つ大事なことは、物のアフオーダンスの多様な可能性を十分に経験す

ることではないだろうか。ある物は常に複数のアフォーダンスの余地があり、特定の使い方が文化的しつけの元で規定されているにせよ、特に小さい子どもは多種多様な使い方をする。一見でたらしめとも思えるいろいろな使い方に、彼らがまさに多様なアフォーダンスを学びつつある特徴が現れているととらえることが出来るよう。

五歳児が巧技台を組み立て、高い位置に細長い板を横に渡した。両手を横に開いて、歩いて行く子どもがいる。また別な子どもが、足を少しずつずらしながら、ゆっくり進んで渡る。さらに別な子どもは、両手・両足を使って、ぶら下がる。これらのどの動きも対象である横板が高い位置に横に渡されている場合にふさわしい動きである。同時に、他の似た形の対象に対して転用できる動きでもある。どの対象を取り上げても、この程度には、多様な動きが現れてくるだろう。

組み立てた物への関わり

子どもが大型積み木をいじっている。一つを両手に持ち、床に置く。もう一つを取りに行き、その隣に置く。いくつか並べて最終的に大きな四辺形に囲む。一か所が空いてあり、そこに、四角い台の枠を置き、その間から中に入った。また、平たい台をその横に置き、上から滑って「外」に出た。

ここでは、個別の動きは、例えば、立方体の積み木を持ち上げるといった基礎的なものであり、その形に見合った動きになっている。だが、それを組み合わせたときに新たな動きが生じる。四角な枠を置いて、そこを通り抜けるのである。穴のようなものがあり、体の大きさに大体合う大きさであれば、そこをくぐり抜けるという行為の可能性が生まれる。平たい台が斜めにあれば、滑り降りるという可能性が生まれる。それは必然ではない。別な動きをして、もよいのである。また、個別の動きとして見れば、

各々が持つアフォードダンスの内の一つであると了解できる。だが、この組み立てられたところで見ると、この動きは優勢な動きとなっていると言える。子どもが自ら組み立てることにより、ある種の動きの可能性を物を介して作り出しているのである。



遊びの流れの揺れ

個々の動きの可能性のみが子どもにとっての「意味」ではない。遊びが全体として、ままたごとであったり、「ドンジャン」であったりする。それは一つの文脈あるいは意味状況を作り出す。だが、それは個々の動きを抜きにして成り立っているのではない。

い。「ドンジャン」であればまさに細長い板などの上で両端から一人ずつやってきて、出会ったときに両手のひらをぶつけ、じゃんけんをして、負けた方が別な道から戻り、勝った方が次の子どもに出会うまで進む。個々の動きに解体したときに、先ほど述べた個々の物への動きの連鎖となっている。この遊びの意味状況はその動きの連鎖そのものであり、ある動きをしたときにそれが次に優勢となる動きを喚起する。相手と会ったときの両手を合わせる動きは相手を跳ばすようなものではなく、相手が出す手の動きに合わせたものとなる。

同時に、実際の動きの連鎖は固定的ではなく、絶えず、物の持つ多様なアフォードダンスの可能性に開かれている。ドンジャンやままたごとにすべての行為の局面で専念していることは減多になく、途中でよそ見をしたり、おしゃべりをしたり、他の子をくすぐったり、そばにある積み木を拾ったり、持っている紙の棒を振り回したりする。時に、遠くでやって

いる別な子どもが使っているブロックのところに
行つて組み立てたりしつつ、また元の遊びに戻る。

そのような「揺れ」は遊びにつきものであり、おそ
らく遊びが遊びであるための重要な要件になつてい
る。同時に、個々の物へのまた人への多様な触れ合
いの可能性の各々を様々な機会に実現する動きだか
ら、もののリアリティ（現実性・実在性）を実感す
る機会にもなっているに違いない。

時間を置いてのまねび

ごっこ遊びの場合に見立てるということが生じ
る。そこでは、必ずしも対象の特性自体からは了解
しにくい動きが生じる。四歳児が、色水を茶碗に入
れたりしている。見ていると、観察者に対して「何
にしますか」と聞くので、「そうね、カレーライ
ス」と答えると、「ちよつとお待ち下さい。カレー
ライス、ピッ」と言つて、持っている皿に対して指
で押しつつ横に急に動かす動きをする。観察者には

ファミリーレストランでウェイトレスが注文を取る
際の動きに思える。この場合に、皿に対しての動き
として「ピッ」とする動きはあらかじめある可能性と
は言い難い。レストランごっこの意味状況で初めて
現れたものであろう。家族でファミリーレストラン
に行つた時の印象を思い起こしたのかもしれない。

その動きは記憶されているのだが、大事なことは、
それが身ぶりとして模倣の形になっているとい
うことである。いわば「身倣い」なのである。思い起こ
すとは身倣いの過程であり、類似した行為が出現し
たことから身倣いを刺激したと見なせるのである。

同様に、子ども同士のやり取りも身倣いの過程で
ある。互いに動きをまねび合うのである。また、物
に各々が関わるから、そこでやり取りと見える関係
が成り立つのである。声や表情を含めて、動きと見
なせば人との関係もまた身体的関係なのである。

（お茶の水女子大学）

ある日の育児日記から

(58)

佐藤 和代



敬が主夫になってはや半年。会社員だった頃は、子どもと接する時間も余裕もあまりなかったので、失業したらどんな子育てをするかしら、と興味しんしんだった私です。

で、結果は、というと。：男っていいかげんなのだ！と認識を新たにしましたね。

何がいいかげんかって、その場がしのげばいいという態度。有が車のレバーにさわろうとして「ダメ」と言われ「何で？」とききます。敬はひとこと「爆発するぞ」。圭が寝る前にアイスクリームを見つけて「食べたい」と言うと「それはお酒

を凍らせたものだ」。

きわめつけはおぼけシリーズです。有がパジャマに着替えようとしなかったとき「パジャマおぼけがくるぞ」と脅したら、本気でこわがったのに味をしめ、以来、パジャマおぼけ、歯磨きおぼけ、おかしおぼけと、登場したおぼけは数知れず。最近はおぼけはお父さんの友達で、いつでも知り合って、電話番号はこれで、電話一本ですぐ呼べる：と、だんだん手が込んできました。

さすがもと営業マン、口八丁手八丁。でも、どうしてパジャマになったほうがいいのか説明したほうが早いと思うんだけど。：私は敬の子育てをひそかに、うそ八百育児と呼んでいます。



このごろアニメTシャツを着ないま(6才)と、アニメTシャツしか着てられない病(3才)

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(1)——

豊田 一秀

自分の体力に限界を感じて、幼稚園の教師を辞めて早一年が過ぎた。私は今、学生としてイギリスに暮らす身である。未知の地に家族四人で住み始め、

多く出版されているが、今回は限られた内容になるのは承知の上で、私共が実際に体験した事を中心に話を進めてみたい。

笑いと涙の日々のスタートであった。その中から今回は十五歳と十三歳になる二人の息子たちの学校について、入学の依頼から日々の生活まで、少し振り返って述べてみたいと思う。イギリスの学校についての本は、学術的なもの体験記的なもの、それぞれ

九月からのイギリスの新学期に備えて子どもたちの学校を探し始めたのは、渡英前の五月の下旬ぐらいからであった。私の行く大学以外には住むところさえ決まっていなかったのであるから、それは全く雲を

攢むようなことであつた。私は自分たちの住む家と子どもたちの学校を探すべく、一人でイギリスへ二週間程旅立つた。探す手順として、まず私が車で大学に通える範囲にある中学校を探し、次にその学校に子どもたちが自転車を通える範囲に貸家を探すという順序でことを進めることにした。学校の選択肢

として日本人学校が現地校か、現地校でも公立か私立か、というように考える要素は多いのだが、せっかくイギリスに来たのであるから、最初から日本人学校に入れることは考えなかつた。そこで、現地の公立にするか私立にするかという点に絞つて考えてみた。しかし、資料を少し集め出してみて、さほど選択の余地は残されていないことにすぐに気が付いた。私たちであつた。私立学校の月謝が高いのである。私立といつても様々ではあるものの、高い学校になると一学期の月謝が通いで三千ポンド以上、寮だと四千ポンドにもなってしまうのだ。円に直せば一年間で、通いで約百三十万、寮で約百七十万円位

になろうか。二人分のことを考えると、これはどう逆立ちをしてみても無理である。もちろん語学力を含めた子どもたちの学力の問題も考えねばならず、ある意味で自然に学校は絞られてきたと言えよう。現地の公立校である。

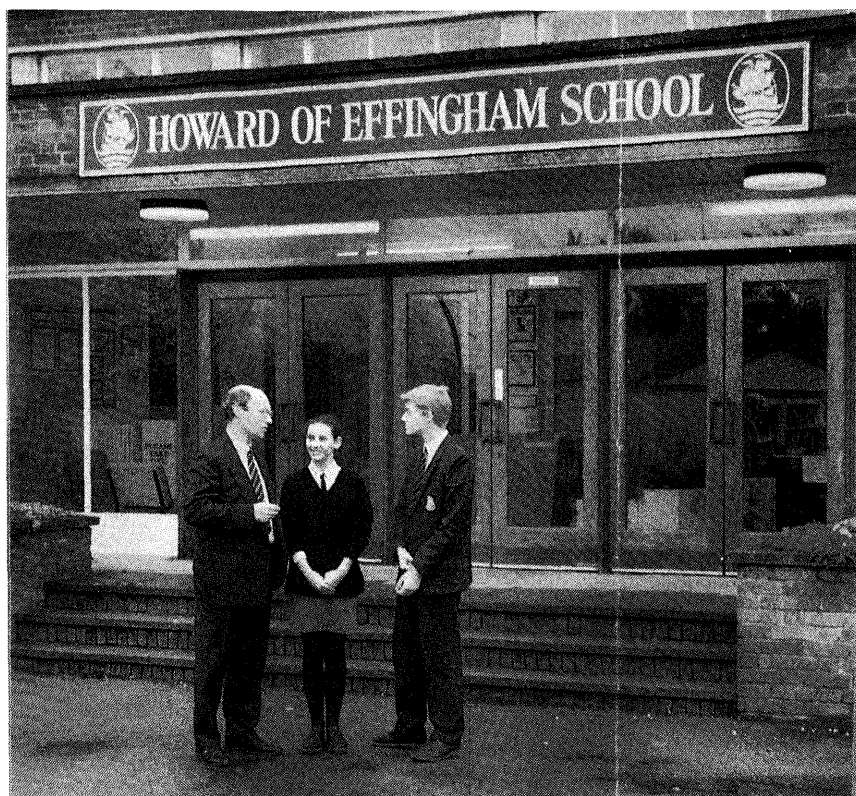
イギリスの学制は日本と少し違っているのだが、あえて日本流に言うなら十六歳までが義務教育で、十一歳から十六歳までの五年間を中学校に通う（セカンダリースクール）。その後、高校（シックスフォーム）に通う場合は二年間である。イギリスでは政策上、日本で言えば中学と高校を合わせたようなコンプリヘンシブスクールという七年制の公立校が近年多くなっている。

息子たちの学校を考えたとき、中学から高校へはエスカレーターというわけではないが、同じ学校に長く学べる利点もあるかと考え、このコンプリヘンシブスクールを探すことにした。問題はどの学校がいろいろの意味で良いかということである。これに

は在校生やその父母、卒業生や地域の人たちによる、いわゆる口コミが重要であるが、二週間ばかり滞在している外国人の手に負えるものではない。仕方がないので、毎年秋に新聞に発表される公立、私立を合わせた、一種の共通試験の成績ベスト千校のリストを参考にすることにした。試験の成績の良い学校が、本当の意味で良い学校なのかどうかは、はなはだ疑問ではあったが、これしか判断の資料がなかったのである。二校ばかりを選んで、実際に足を運んでみることにした。失礼を承知で予約なしで訪問した私であったが、どちらの学校でも暖かく迎えてくれた。授業の事、クラブ活動の事、特に英語を外国語とする生徒への援助についてなど、話を聞くことができた。イギリスには大英帝国のなごりか、少し前までは英語を話せない子どもの為に、無料で入れる専門のクラス（ランゲージユニット）があったのであるが、御多分に漏れず財政の問題で廃止されてしまった経緯がある。

しかし、今日でもそのような子どもが在校する学校には、週に何日か専門の先生が教えに来てくれるそうである。有り難いことであると感謝した。

地域の環境や校庭の広さなども含めていろいろと考え、そのうちの一校に入学をお願いすることに決めた。公立であるから、入学の基礎的な資格は年齢と居住地区である。外国人の場合は、この他に両親がイギリスにすることが条件となる。校長先生に一体どこに住めばこの学校に入りやすいのかと伺うと、親切な先生は地図を書きながら土地勘のない私に校区の説明をしてくれた。教育熱心なのはイギリスも同じのようで、評判の良い学校には入学希望者がその校区に引っ越してくるので、学校がどんどん大きくなってしまいうさである。その学校も、もうすでに定員を越えていてキャンセル待ちの状態であったが、その学校に通う必然性の高い順に入学できるという話であった。すなわち学校に近い順というわけである。私は学校の用務員室にでも住みたい



▲学校の正面玄関で生徒と話す校長先生

ような気持ちであった。
しかし、実際に入学を許可するのは、学校ではなくて、日本で言うところの教育委員会なのだそう
で、その場所と担当者の名前を覚えてもらった。時間のない私は教育委員会にも、こちらの常識である予約もしないで行ったのだが、係の人はやはり嫌な顔もせずに来てくれた。

そして私の希望を聞くと、公立校は地域の子どもを受け入れる義務があるのだから、近くに住みながらもしも受け入れら

れない場合には、地区の行政に直訴して学校の定員自体を増やしてもらうという「裏技」もあると教えてもらった。入学志望書をもらい、住む家の契約が出来たらすぐに郵送しなさいとアドバイスを受ける。

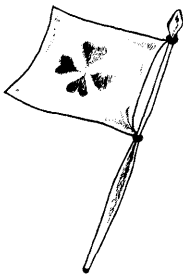
入学した後に分かったことであるが、普通は入学の前の年の十一月ぐらいから学校の説明会などが催され、一月か二月位にはおおよその入学者の予想がついているそうで、私が訪ねた六月というのは相当に遅かったのである。しかも定員を越した入学希望者がいるのであるから、予約もなしに、こんな時期に現れた外国人など門前で断わられても仕方のない状態であったと思う。それにもかかわらず、校長先生は私の子どもたちが入学できるような方向で考えて、教育委員会を紹介して下さったわけである。そして、また教育委員会でも親切に裏技まで教えてもらい、助けられた。この経験を通して、私はイギリスの懐の深さを強く感じさせられた。誰もが「外国

人」に慣れているだけでなく、弱者に寛大であった。

次に借家を探す苦勞があったのだが、今回の主題から外れるのでここでは省略する。結果として、学校まで自転車で十五分程で通える所に良い一軒家を見つけることが出来た。私が希望した学校、ハワードオブエッフィンガムスクール (HOWARD OF EFFINGHAM SCHOOL) への入学許可が、教育委員会より日本に届いたのは七月の中頃であっただろうか。

拝むようにして封筒を開けた私であった。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)



鏡の世界の子どもたち

——左利きの幼児の保育をめぐって——

齋藤 薫

安野光雅は、『ふしぎなさーかす』（子どものとも
184号）のエンディングとそれをうけた裏表紙とで、
「ふしぎなさーかす 安野光雅さく／え」の文字を
左右逆転させ、りんごにのった案内役のピエロのペ
ペを一八〇度転換させて描いている。それは、「逆
さ」ということが、神秘や魔術に結びつく「ふしぎ
な」ことだからにほかならない。

子どもたちが大勢あつまると、なかに「逆さ」の
子どもがいるだろう。スプーンや箸、クレヨンを左

手で操る、左利きの子どもである。「ふしぎな」鏡
文字を書いて自らの異質性を証明してみせるより前
から、彼らは一人で「逆さ」の感覚を味わってい
る。

もちろん、利き手が左手であることは、それ自体
は何のふしぎも生みはしない。ただ、左利きであり
ながら右利きの人の多い社会で生活することが、子
どもたちにしばしば「自分のほかはみんな逆さ」と
いう奇妙な体験をさせ、あるいは、ピエロのペペに

話しかけたつもりがベベの足の下のりんごであったというようなもどかしさを覚えさせるのである。

わたしたちは以前、鏡をのぞいて、左は右で右は左であるという、ふしぎな事実になんか夢中になった。たとえば、右手をあげて振ってみる。すると、鏡のなかの「わたし」は左手をあげて振っている。振った右手をのばして、おそろのおそろ鏡をさわってみると、鏡の「わたし」の左手は、わたしの右手に触れているようにみえる。つまり、左は右で右は左なのである。

鏡のふしぎさに遊んだあとで、絵本をみるとどうだろう。たとえば、絵本のなかのだれかがスプーンをもっている。スプーンは右手に握られている。横向きでも、後向きでも、こちらを向いているときでさえ、スプーンは右手がもっている。鏡と違って、絵本では右はいつも右。ふつうのときに他の人を見るときと同じで、右はいつも右のままである。

ところが左利きの子どもの場合、鏡での発見は、そのまま絵本に引き受けられる。絵本に描かれる利き手は、ほとんどの場合右手であるから、左手でスプーンをもつ子どもには、鏡のなかの「わたし」も絵本のなかのだれかも、「左は右で右は左」の事例である。

たしかに、絵本に登場する左利きの子どもも皆無ではなくて、センダックは『あなはほるもの おっこちるとこ』（クラウス文・センダック絵、岩波書店）のなかで、子どもたちのいく人かを左利きに描いている。大縄跳びの縄をまわす男の子、犬を抱く男の子、大きなシャベルを使う女の子、フォークをもつ男の子。また加古里子が描く『とこちゃんはどこ』（松岡享子文・加古里子絵、こどものとも）の縁日の場面にも、ふうせんやヨーヨー、わたがしやキャンディーを左手にもつ子どもがいる。

おもしろい例では、ベールマンズの『げんきなマドレーヌ』（福音館書店）の「パリの、つたのか

らんだ ある ふるい やしきに」規則正しくくらす「12にんの おんなのこ」は、「2れつになって、はを みがき、」の場面で洗面台にむかって右側にたつ六人は右手で、左側にたつ六人は左手で歯を磨いている。彼女たちが実は全員右利きであることは別の場面から明らかであって、ここで歯ブラシをもつ「おんなのこ」を左右に対称的に配したことは、完全に構図上の問題といってよい。このような秩序のなかで、右に対峙する左は美しいバランスを創出する。同時に『マドレーヌ』は、実際に左手で歯ブラシをもつ子どもは、規則や秩序の枠内には位置を得にくいことを象徴している。

ポケットは、とりわけ幼児にとって便利な袋である。ハンカチとちり紙のほかにも、おまじないをかけた石、きれいな葉、せみの脱け殻、何かちょっとした宝物をしまって、出したり入れたり。だから子供服には、大人の服より充分なポケットがついてい

る。しかし、なかにはポケットがひとつだけの洋服があつて、そういうとき、ポケットはきまって右側である。左利きの幼児がハンカチをポケットにしまおうとすれば、左手でハンカチをとる、右手にわたしてポケットに入れる。あるいは、左手をのばして右のポケットに入れる。当然、時間はかかるし、不本意ながらハンカチはくしゃくしゃになってしまう。

幼稚園に行く頃の幼児だれにとっても、ひとりで洋服を着脱することは一大課題だろう。＂ひとりでお洋服が着られない＂と、お泊り会にも行けないし、夏のプールでお友だちからおいてきぼりをくってしまふ、と幼児は考える。なかなか深刻な問題である。反対に＂ひとりで着られれば＂、さらに＂ひとりですぐきれいに着られれば＂、途端におりこうさんといわれ、しつけの行き届いたきちんとしたお子さんとおもわれ、親にも先生にもよその大人にも

ほめられる、ということも幼児は知っている。

ところが、ズボンの前のファスナーはいつも右向きで、スカートの横のファスナーは必ず左側ではないだろうか。肩ボタンやプールの帽子のホックが左側についているのは、右手で止め外しがしやすいからである。そのため利き手が左手の場合は、不自然な向きから、あるいは近すぎるところで作業をしなければならぬ。

もう少し大きくなって、バッジや名札を自分で胸に付けるとき、左手主導で左胸にピンをさすのは至難の技だ。安全ピンの針が布を掬おうとしても、左胸と左手と目とが狭いところでごちゃごちゃして、自由にならない。だから、いつも名札が斜めだからといって、その子どもがへそ曲がりであったり、だらしないわけではない。もし、名札やバッジをどちらの胸に付けてもよいのなら、話はずっと簡単だろう。

手を洗うことは、何の問題もないと思われるかもしれない。ところが、左利きの幼児は、水道の栓をしめるのに細心の注意が必要である。普通、親指以外の指は親指にむかって動く方がその逆と比べてはるかに力がある。うっかりすると、栓はほかの子どもが開けられないほどの固さでしまってしまう。

ときどき、大型シンクや風呂場の蛇口で、栓が横についているものがある。もちろん右横に。それでも意識しなければ、左利きの幼児は左手を出して栓をひねろうとするだろう。水を出すときには、蛇口に何かを尋ねているような姿勢になり、立ち去ったあとには、ポタポタと水がたれているかもしれない。幼児が身体をかしげて水を出そうとしている姿勢は、愛らしい。しかし、ねじれた左手で、水を上手にとめることはできないのである。

また、よそのお宅やお店でアイスクリームをいただくとき、せっかくのおしゃまであっても、左利き

の幼児はスプーンをとり落としたり、あるいは口に入れるほうを手でもってしまつて小言をいわれることが多い。スプーンの柄は、きまつて右側をむいて置かれてゐるからである。左利きの幼児が左利きの大人以上に厄介なのは、「なぜ上手にできないのか」という問いかけに対して、右利き社会の不条理という答えをもたないことにある。さらに加えて、まわりの大人たちの多くが、鏡の世界のからくりに気づいていないことにある。

保育園の給食や幼稚園での食事のときの「きまりごと」は、彼らをさらに混乱させる。食事のマナーを身に付け、「ばっかり食べ」をやめるために、食器や箸・スプーン・フォークの置き場所を指定することはないだろうか。配膳の典型は、右手で箸をもつ場合を想定してできている。お友だちや先生と確認しあつた配膳は、左利きの子どもには、ふしぎと食べにくい配置となつてゐる。子どもが左手で箸を操るのをみて「ぎっちゃで、ぎこちない」というの

は偏見だが、本当にぎこちないのであれば、それは食器の配置と皿のなかの盛り付けを逆さにすれば解決されることもかもしれない。

フォークで、ナイフの代用も出来るように片方が幅広くなつてゐるものがある。普通は魚やお菓子を切り分けるのに活躍するが、幅広い一本はいちばん左と決まつていて、左手でフォークをもつ場合は役に立たない。子どもが使う機会はあまりないが、皿のうえのやわらかいものやソースが掬いやすいように片方が平たくなつてゐるスプーンも、左手でもつと平たいほうは上になる。

さらに、はさみはなかなかの難物である。園では、線にそつて丁寧に紙を切ることが少なくない。たとえば、紙に描かれた顔の外枠の線にそつて切りぬいてお面を作る。「線にそつて」と言う意味が、線の内側か線の外側か線の上かを迷つて、幼児ははじめて線の太さに気づくだろう。「線の外側を切る

こと、お面のまわりに線が残るようにしましょう”という、先生の指示をうけて、幼児は切る場所を確認する。“線の外側”。ところが、なぜか、ねらった線よりほんの少し向こう側が切れてしまう。理由は、わからない。

はさみは、まっすぐの姿勢で使うように教わっている。そのとおりに注意深くやっても、“線の外側”きっかりに切っているつもりでも、線の外側には細い余白がのこる。そのこともは「上手に切れない」とため息をつくだろうし、“よく見て、丁寧に切りましょう”と改めてアドバイスを受けるかもしれない。

実は、左手で右利き用のはさみを持つと、はさみの刃が紙を切断するところが切り手から見えにくいのである。つまり、切り手の目に紙とはさみの接点ととらえられる点より、はさみの刃一枚分向こう側が、実際の切断点となる。幼児用の刃の厚いはさみでははさみの二枚の刃の交差点を“線の外側”びっ

たりにあわせても、目に見えてずれたところが切れるのだ。体験からこのことに気が付いた子どもは、切断点を確認しながら紙を切り進むために、約束をやぶって身体をかたむけ、刃の向こう側を覗き込みながら作業をするだろう。こうすると上手に切れる。

もしも、家庭で左利き用のはさみを使っている幼児がいたとすれば、きつねに化かされた思いがするに違いない。左利き用のはさみは、右利き用のはさみと刃のあわせ方が逆である。左利き用のはさみを左手でもって紙を切ると、はさみが紙を切る点が手前に見える。それに慣れている幼児は、園のはさみをもってみて、勝手の違いがふしぎだろう。通常、苦勞なくはさみを操っているものだから、刃の向こう側を覗き込めばいいという発想もない。切っているつものの線と実際に切れた線とのずれに愕然とするだけである。

本当なら、手は両方つかえたほうが便利だし、左利き、右利きといってこたわると、せっかくの鏡の世界のふしぎさが、身体条件の能力のようにとらえられてしまう不愉快さを伴う。しかし、「この世の中は、多数派の右利きにとって都合がいいように出来ている。ということは、少数派の左利きにとっては、具合が悪く出来ているということにはかならない。」(マルティン・ガードナー、坪井忠二・小島弘訳『自然界における左と右』紀國屋書店) というのも、真実だ。左利きの小さな人たちが、理不尽な混沌さのなかで、ふしぎな世界をおもしろがることもできずにいるとしたら、あまりに気の毒ではなからうか。

最後に。左利きの小さな女の子は、お手洗いを汚しやすいかもしれない。彼女に必要なのはお小言ではなく、ただ、完全におわってからトイレットペーパーをとるようというアドバイスである。洋式、和式にかかわらず、トイレットペーパーは右側につ

いている。とくに意識をしなければ、トイレットペーパーには利き手がのびて、おしりはどうしても斜めを向いてしまうのだから。

(お茶の水女子大学大学院)



子どもたちへのまなざし

(15)

おばあさんうさぎのこと

松井　とし

幼稚園で仕事をするようになった時、園には白いうさぎがいたが、無表情にただモクモクとキャベツを食べ続ける、少し汚れたそのうさぎを私は愛せなかった。

木製の小さな小屋を園庭のまん中に引き出し、ホースで洗う時には、ストーブを囲う金網で仮の居場所を作り、うさぎをそこへ移した。土の上に置かれると、遠慮がちに自分の周りをピョンピョンと回ったり、前足で土を掘ったりして、うさぎは小屋の中にいる時とは違ってみえた。そんなある日、せめてうさぎらしく運動させてやれないものかと思い、金網を少し持ち上げ四角い金網の先端をつぼめると、とたんにうさぎは遮二無二走り出した。腰に金網をあてて、逃げないように地上から二〇センチ位の高さを保ったまま持ち上げ、私も必死に走った。金網を下ろすと、うさぎは静かにすわった。満足げなそのようすを見ていて、何だかうれしくなった。それからはこの奇妙な二足四脚が習慣となり、いつのまにか私はうさぎに話しかけ、うさぎをかわいいと感じるようになっていた。それで

も、放してしまうことには不安があり、放し飼いに踏み切れないまま時が過ぎた。

夏休み中の日直のある日、うさぎは金網の縁を掘り続け、ついに金網の外へ出てしまった。初めて、うさぎの能動的な強い意志を感じ「そんなにしたいのなら……」と、心を決めた。近所を徘徊する猫たちの存在が気になったが、後ろ足をピッピッと蹴り上げて走ったり、クローバーを食べたり、木陰で足を投げ出してくつろぐ姿は本当に生き生きしていた。

ところが洗った小屋が乾き、夕方になっても一向に小屋へ入る気配はなく、段々不安になってきた。仕方なく放したまま野菜を買いに出かけ、八百屋のおじさんに話すと「大丈夫、うさぎは帰巢本能があるから」と言ってくれた。新鮮な野菜を小屋の中へ置き、うさぎの後ろから声をかけながら追っていくが、なかなか小屋には入ろうとしない。ようやくゆっくりと小屋のまわりを一周して入口の前までくると、うさぎは後ろにいる私を振り返った。そして前足を入口にかけて中を覗くと、一気にビヨンと中へ入った。私は思わず「ありがとう」と言った。あたりは夕闇が迫り、静かだった。

うさぎが振り向いた瞬間、私にはうさぎが笑ったように思えた。「心がふれあった」という思いはその後の多くのうさぎたちとの信頼にみちた日々の原点となり、今も私の心に深く刻まれている。

(元幼稚園教諭)

二つの保育形態を体験して

——保育者として思うこと——

高橋 陽子

この数か月、マスメディアを賑わせてる宗教関連のニュースの中で、この施設で生活している子どもたちへのインタビューや実態調査で明らかになってきたことを耳にし、初めは憤りのみを感じていたが、ふと、どんな形であれ、子どもたちは皆、選択できない社会で生活し始めることに気付いた。強いて言えば、親を選べない——どんな育て方をされるか、住む場所を選べない——国に始まり、地域、住居、など様々な環境がある中で一つだけ背負って生まれ出る。そこで教育というものが必

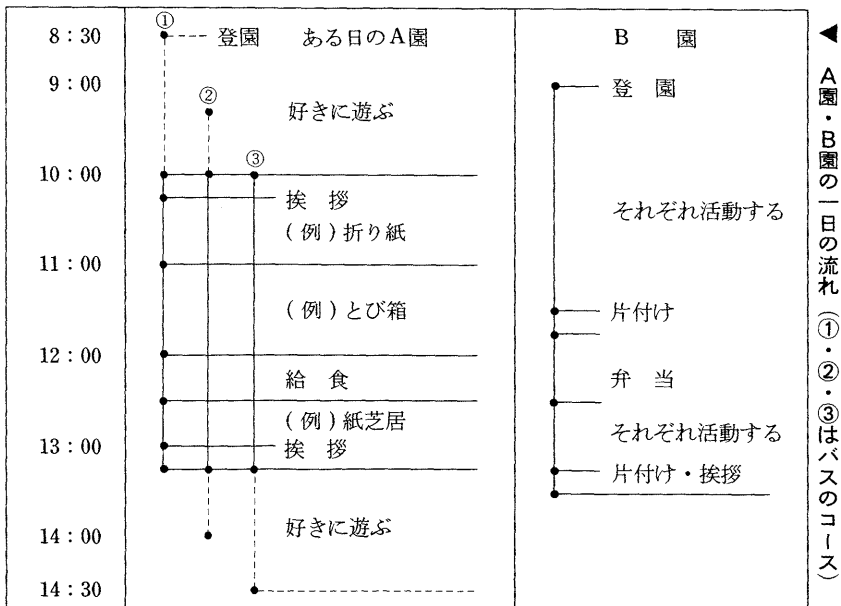
要となり、人格を形成する重要な位置を占めることになる。ところが、先の宗教団体の施設のような場で教育されたものと、そうでないものとの間に、大きな違いがあるように、どこでどんな人に、どのような形で教育を受けるかによって、教育のめざすものは同じでも、子どもたちに与える影響は変化するのではないか、と思った。どの教育の場も、子どものために最良のことを考え、実践しているし、どの親も自分の子どもに最適の環境を選択する努力を怠らない。

さて、私は研究者ではないし、深い知識があるわけではなく、幼稚園の教諭という立場にいる一人である。ただ、分と形態の違う二つの幼稚園を体験したので、大部分の子どもたちがはじめて経験する集団生活の場である幼稚園が、子どもに対する思いは同じでも地域や園の方針によって方法は色々あることを、お伝えしたいと思う。

A園は新興住宅街の中にあり、一台のバスが三廻りし園児をあちこちから乗せてくる。徒歩通園児も何人かいる。年少一、年中・長各四クラス、三百名程の私立の幼稚園である。

B園は大学のキャンパス内にあり、保護者つき添いで、電車、バスを利用したり、徒歩で通園してくる。年少・中・長各二クラスずつ、百七十名程の国立の園である。

一日の流れを見ると、A園とB園の一番大きな違いは、何をするか決められているか否かである。A園は午前中二つ、午後一つのカリキュラムをこなしている。



一般に一斉と呼ばれる活動で、子どもたちはクラス全員で一人の担任の指示を聞いて活動する。B園の子どもたちは登園すると自分自身で活動を見つけて取り組むのである。年少児で見ると、「電車で遊ぶぞ」と決めたきた子ども、「外で遊ぶぞ」と部屋に入っすぐ思った子ども、とりあえず金魚に餌をあげて時間を過ごす子ども、先生の洋服をしっかりと握ってずつついて回る子ども、千差万別である。

A園での好きな遊びは、保育室か園庭かは先生の判断で決まっているが、保育室では、ブロックやままごと、粘土などして自由に遊んでいる。そして全員が揃うと、おはようの歌を歌い、一斉の活動に入っていく。

先生の立場でいうと、A園もB園もそれぞれ難しい。A園では、三年間違う環境で育ってきた三十人強の子どもたち全体に話しても、一人一人の子が自分のものとして話を聞いてもらえる様に早い時期にしていく難しさがあり、B園では、二十人の違う子どもたち一人一人を理解し援助し、伝えるべきことは伝えていかねばならない

難しさである。一斉保育でも自由保育でも、一人一人と向かい合うことは同じでなくてはならないはずが、一日の過ごし方が違うことによって、一斉保育では全体の中の一人であって、全体を^{プラス}の方向にするために一人一人を援助する形になる。例えば、折り紙でうさを折ることにする。先生は大きな紙を持って黒板の前に立ち、子どもたちは六人がけの机に折り紙をおいて先生が折るのを見て折っていく。見てわかる人もいれば、「できない」と泣く人もいる。折れた人は、折れない人が先生に直接教えてもらう間待つ。できない苦勞、ずっと座って待つ苦勞をしても、どの子どもでもできあがると大変喜ぶ。先生も全員が何とか折りあげたことが嬉しい。

とび箱をする時間になると全員外に出てまずは準備体操をする。それからとび箱をはさんで男女向き合うように一列ずつに座り、自分の順番を待つ。内容としては、跳ぶことよりなれることにねらいをおいて、台にあがって、ビヨーンととびおいて、好きなポーズをしたりする。年長になつてとび越すようになってきても、中には

お尻がついてしまう人もいる。何人かがお尻をおしてあげたり、「がんばれ」と応援してあげる。思わず「優しい気持ちがあるな」と嬉しく思ったりする。

殆どの時、先生が子どもたち全員に話をするため、興味のもてるような話し方をしたり、手あそびで注意を引いたり、ピアノで合図することもある。時には大きな声で強い口調になることもある。そうすると入園して何日もたたないで、たいていは園の流れにのって活動するようになる（初めから部屋に机が出てあり、ここがあなたの場所ですよ、と決められていることも関係するが）。そして早い時期に、今は遊ぶ時間、今は話を聞く時間、今は片付ける時間、と自分たちでわかるし、外で全年学そろって園長先生の話を聞くお集まりでは、整列して静かに話を聞き、最後は行進曲に合わせて園庭を一周して靴箱に帰るようになる。

もう少し経つと、フルーツバスケットやイスとりゲーム、戸外ではねずみと猫のゲームを大勢で楽しむようになる。

全員で同じことを同じ様にできるようになると、先生としては余裕が出て楽しいし、子どもたちも真剣だった、いきいきと楽しそうだったり、色々な表情をみせてくれる。その表情が励みとなって、これからどうしていい、などと全体に対しての目標をもっていく。

子どもの立場で考えると、絵を描くのが苦手で、遠足や運動会といった行事の次の日には必ず画用紙に絵を描く時間があるので、「今日は嫌だな」と思い登園する人もいるが、その時間になるとクレヨンを持たざるを得ない現状もあるように、得意なこと、不得意なこと、楽しいこと、つまらないこと、様々ではあるが、広く色々な経験ができ、話を集中して聞こうとする気持ちが身につくようになるかが決まっている楽しさもあるだろう。

B園ではどうだろう。殆んど何をしても良いし、どこに行ってもいいのは結構だが、何をしようかなかなか決まらない人には、好きに使ってよい二時間なり三時間が負担になるかもしれない。入園してしばらくは、先に述べたように、すぐ遊び出す人もいれば何となく回りの様

子を窺って過ごす人もいる。

帰りの片付けも大変である。早く帰りたい人は丸く並べられたイスにさっと座るし、まだまだ遊び足りない人は、「片付けよ」のことに「もっと遊びたい」と泣く。一度片付いた遊具をまたばらまく。部屋から逃げ出す。色々な形で抵抗してくる。それに対して先生はどうしてくるかな、と探っているかのようにも思える。「片付けよ」から親に引き渡すまでに三十分以上になる。一人一人違う行動をとる子どもたちに、先生は一人一人こ とばをかけていく。とても長い期間をかけて園の流れをわかってもらい、「先生は今こういう気持ちにいるのよ、あなたはどうか？」と通じ合っていく。二十人二十様の生活をしている中で、先生は全員に同じように穏やかにはいかない時も多々あるし、難しい。

それとともに、子どもたちに見せても、今までとは全く異なる場所で、「ああしなさい、こうしなさい、ダメ、いけません」とも殆ど言われず、放り出された感じで大変だろう。

Kちゃんは、入園当初は、いつも「本を読んで」と言い、先生にくっついて歩いていった。お花を作っている人を見れば、「私も作る」と言い、セーラームーンのスティックを持っている子がいれば、「私も欲しい」と言い、なかなか自分自身でこれがやりたい、という強い気持ちが出せないでいた。そんなまま三学期が始まったある日のこと、お店やさんごっこをする台の上に、Kちゃんともう一人の女の子二人であがっていた。そこへ別の女の子がきて、Kちゃんをおろそうとひっぱった時、「いやだ」といって大泣きした。そばにいた私は、やっ とKちゃんは自分の気持ちを外に向かって出すことができたのね、と嬉しく思った。

Nくんは、自分のしたいことがはっきり決まってい て、常に何かに熱中していた。汽車で遊んでいると、他の子が近づいただけで、「来るな」と怒り出したり、砂場では、頭から服まで砂に埋まって靴なんか脱げていて、全身砂まみれでも黙々と遊び続けている。自分の思 いは外に出せても、なかなか人のいうことは届いていか

なかった。ある日のこと、Nくんが、両手いっぱいぬれた砂を持って、部屋から園庭に出るドアのところに来た。と、ガラス戸に砂を塗り始めたのである。アラッと
思い、最後まで見届けてから、「困ったわね。ピカピカになるように、一緒におそうじしましょうか」と雑巾を渡すと、せっせと拭いて、彼なりに雑巾を洗って返してくれた。私の気持ちを通じたのかもしれないわ、と嬉しく思った。

形態に大きな違いがあることで、経験する内容に差があったり、どういう点で楽しかったり嬉しかったり、困難さを感じるかにも多少の違いがあっても、たくさんの人にふれ合って、気持ちを出しあったりわかり合ったりしながら、自分なりの価値基準を作っていくのだろう。

今回は、二つの園の保育形態の違いから思ったことをとりとめもなく書いてきた。他にも色々な形態、方法をとる園があるとは思いますが、大人の価値基準をそのまま子どもにおしつけるのではなく、子ども自身の色々の感情を素直に現すことのできる、そんな余裕のある教育の場

を用意してあげたい、と思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



編集後記

今月号には、保育現場での動物の話題が二つあった。「飼育」には考えるべき点が多くあると思うが、生き物とのかかわりは大切にしたい。

六月のある夕方、小学生になった娘が、猫に襲われて怪我をした鳩を連れてきた。猫と戦って奪ってきたという。その猫も「私の知り合いの猫」だというからそう恨めない。段ボール箱に入れ、ぼろきれやバンを入れて彼女は看病していた。しかしこのままでは助からないという父親の判断で、翌日、野鳥観察舎内の野鳥病院に連れていくことにした。

翌日、学校でも彼女の頭の中は鳩のことで一杯だったようだ。帰宅す

る私を待って、どしゃぶりの雨の中、荷台に段ボール箱を載せ、野鳥病院に向けて彼女は二十分程自転車をかぎ続けた。別れ際に泣いてしまったが、「いつでも会いにおいで」という言葉を胸に帰ってきた。

翌日も、彼女は帰宅するや否や、祖父と野鳥病院に向かったという。その道中に鳩は死んでしまった。落胆して戻ってきたわが家の留守番電話には、彼女を気遣って、野鳥病院の方からの伝言が入っていた。その後、鳩の事は何も言わない。何も言わずに何を思っているのだろうか。

一羽の鳩を巡って過ぎた数日間。大人にとっては非日常の様な日々だったが、子どもの生活からすれば、これも日常なのだと思う。与えてあげることのできない日常が生き物との出会いの中にはある。(田)

幼児の教育

第九十四巻 第十号

(一九九五年十月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年十月一日

編集兼発行人 田代 和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一〇一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三三五三九五一六六〇四

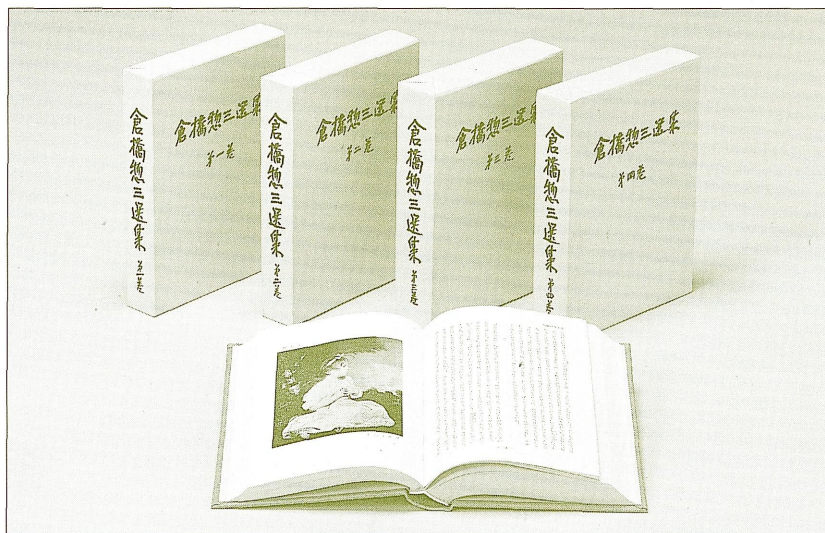
振替 〇〇一九〇一二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

倉橋惣三選集

上製本各巻ケース付き 全4巻 B6判 416~472頁



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

① 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル 定価3,000円(本体2,913円)

② 幼稚園雑草 定価3,000円(本体2,913円)

③ 育ての心・就学前の教育他 定価3,000円(本体2,913円)

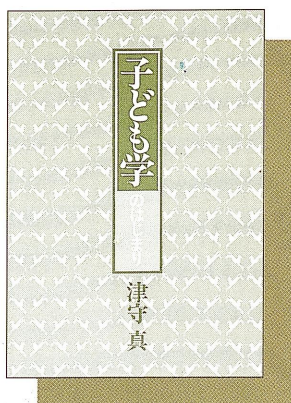
④ 保育案他 定価3,000円(本体2,913円)

第5巻目は平成8年3月出版予定

キンダーブックの

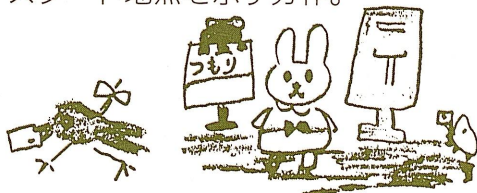
フレーベル館

子ども学のはじまり



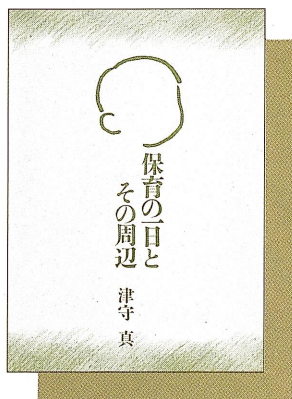
津守 真・著

子どもの行動の見方と研究法について、著者が10年来考えてきたことを論述し、保育の原点を示す。人間学的保育学のスタート地点を示す労作。



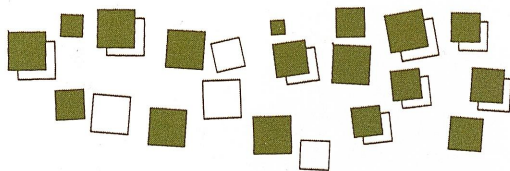
B 6 判・296頁・定価1,750円（本体1,699円）

保育の一日とその周辺



津守 真・著

保育実践の基本となる「一日」を中心に保育論を展開。保育の原点をわかりやすく述べ、豊富な実践と深い省察で、保育者へ新しい保育の指針を明示。



A 5 判・248頁・定価1,600円（本体1,553円）

キンダーブックの
フレーベル館